

「至急避難してください」。朝のコーヒーを飲んでいると、館内放送が流れた。世界貿易センタービルから約五歩離れたビルで働いていた日野紀子さん(34)は、わけも分からず外に出た。

周囲の建物からも人々がはき出されてくる。テロが起きた。次のターゲットはこのビルかもしれない」。管理人の説明に耳を疑った。

「地下鉄も狙われる」と思い、自宅まで一時間半かけて歩き通した。事件への恐怖心でいっぱいになり、一週間自宅にひきこもった。

* * *

九年前からニューヨークで暮らしている。留学した大学でデジタルアートを学び、インターネットのホームページなどを作るウェブデザイナーとして働くようになった。ちょうど、インターネットが普及し始めた時

「目の前のことから」と清掃ボランティア

期。引く手あまただった。ニューヨークに来たばかりのころ、近くの海岸に遊びに行つて驚いた。ビニール袋や空き缶、とうもろこしの芯などが散乱していた。汚さに耐えられず片づけ始めると、若いカップルに「そ

んなことをしてもお金にならないぞ」と笑われた。「清掃ボランティアをやろう」と思い立ったのは、そんな昔のこと。汚さを思い出したからだった。

友人の寺田和美さん(28)と協力を今年五月、ボランティアの参加者を募った。反響は大きく、日本人を中心に約百人から連絡があった。

社会に役立ちたい

最初の活動は市内の公園の清掃。約五時間かけて草取りやごみ拾い、ペンキ塗りに汗を流した。七月にはテロの犠牲者を悼む灯ろう流しに参加。ボランティアの心構えを学ぶ勉強会も開いた。

彼らは口々に、「テロから立ち直ろう」としているニューヨークカーを見て何かやりたいと考えていた」と言う。そうした声にこたえようと、N Y de volunteer(ニューヨークでボランティア) (<http://www.nydevolunteer.org>) とした。

これまでの自分を振り返ると、「面白そうな仕事、給料の高い仕事」ばかり追い求めていた気がする。でも、テロをきっかけに、「社会に役立ちたい」という気持ちが強くなったような気がする。

* * *

目標は、誰でも気軽にボランティアができる敷居の低いグループにしていきたい。「人種や国籍を超えて優しさを分かち合える共同体にしていきたい」

心の軌跡

同時代101年

3



ボランティアグループのスタッフと打ち合わせをする日野さん(中央) ニューヨークで

ボランティアグループのスタッフと打ち合わせをする日野さん(中央) ニューヨークで